

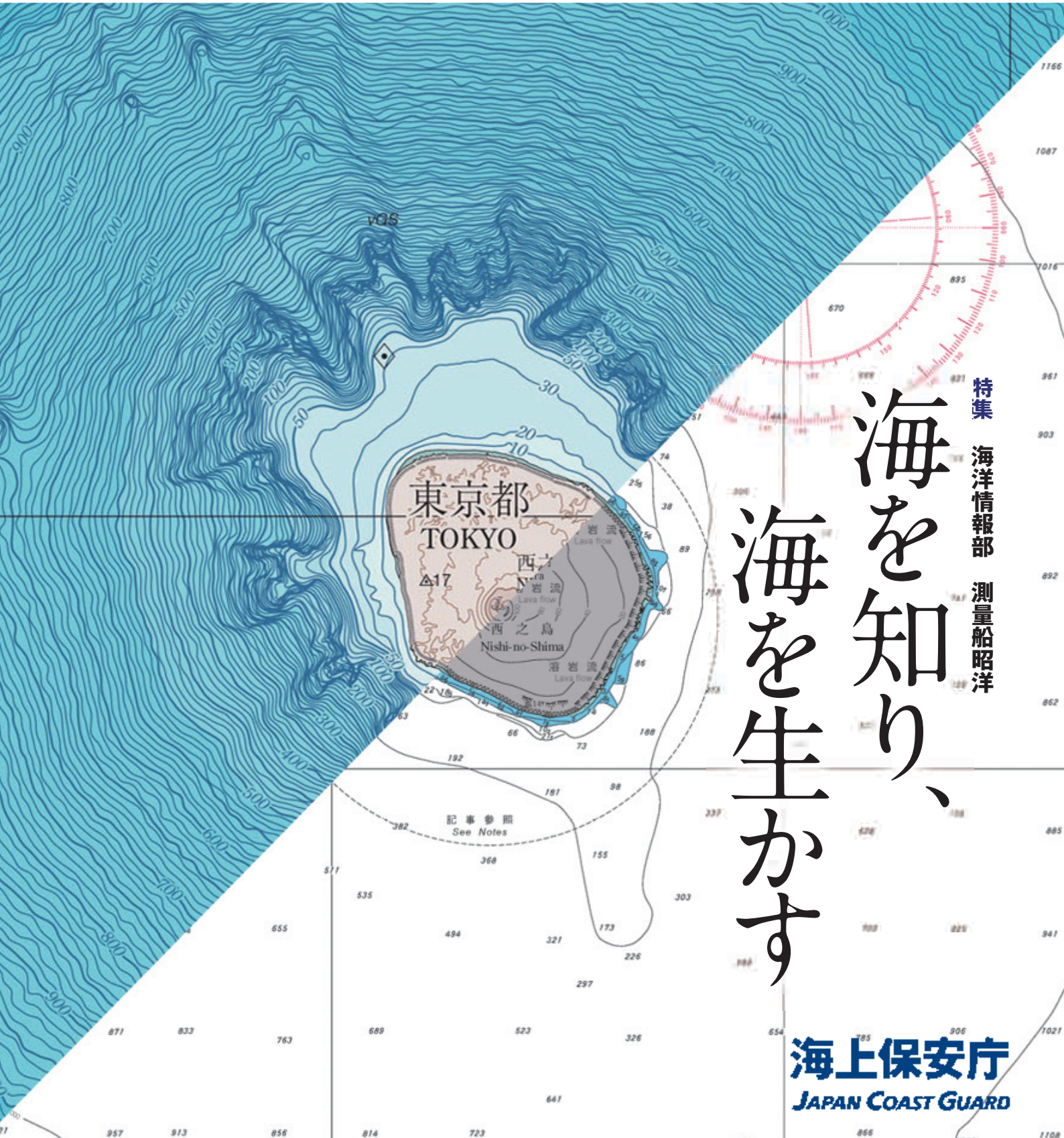
# かいほ ジャーナル



愛します! 守ります! 日本の海

Vol. **73**

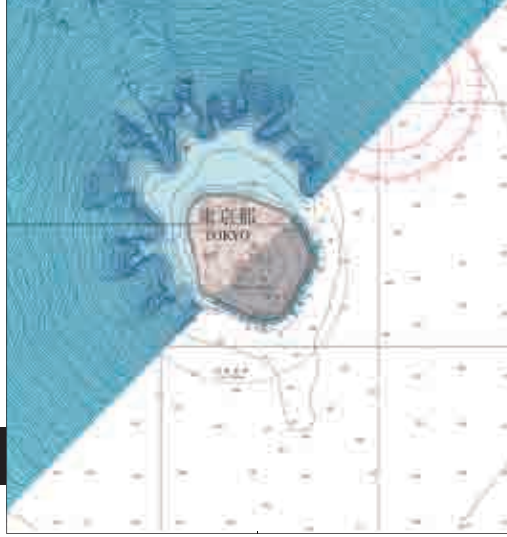
2017 WINTER



特集 海洋情報部 測量船昭洋  
**海を知り、  
海を生かす**

# かいほ ジャーナル

C O N T E N T S



Vol. **73**  
2017 WINTER

## PHOTO GRAVURE

- 1 北太平洋海上保安フォーラム及び世界海上保安機関長官級会合を開催
- 2 隠岐の島北方海域における中国漁船転覆事案
- 2 国際緊急援助隊・救助チームとして海上保安庁職員をメキシコに派遣
- 3 海上保安庁音楽隊 第24回定期演奏会を開催
- 3 149周年灯台記念日

## [特集]

海洋情報部 測量船昭洋

- 4 海を知り、海を生かす

## TOPICS

- 10 ~エトセトラ特別編~ 海洋情報資料館
- 12 **NEWSFLASH** ニュースフラッシュ

裏表紙

## INFORMATION

第18回未来に残そう青い海・海上保安庁図画コンクール受賞作品が決定!!



# 北太平洋海上保安フォーラム及び世界海上保安機関長官級会合を開催



第18回北太平洋海上保安フォーラム

また、9月14日には、同会場において世界の海上保安機関等から長官級を招へいし、世界で初となる「世界海上保安機関長官級会合」を日本財団と共同開催しました。

開催に先立ち、9月12日に迎賓館赤坂離宮で行われた歓迎レセプションには安倍内閣総理大臣がご出席され、「今後、皆様の活躍で、海の平和と繁栄が守り続けられていく事を期待しています。」と述べられました。

本会合では、34カ国1地域3国際機関が参加し、海上保安分野における地球規模で解決すべき課題について、「海上の安全及び環境保護」、「海上セキュリティ」、「人材育成」の3つのテーマに分けて先駆的な取組み等が発表され、意見が交わされました。会合の総括として、世界が直面している課題を克服するため、世界中の知恵及び技術を結集すること、連携の強化及び対話の拡大を図ることの重要性等を確認する議長総括をとりまとめました。



世界海上保安機関長官級会合歓迎レセプション（迎賓館赤坂離宮）



海上保安庁長官



世界海上保安機関長官級会合

隠岐の島北方海域における  
中国漁船転覆事案



10月5日、島根県隠岐の島北方約400キロの公海において中国漁船「LURONG YUANYU 378」と香港籍タンカー「BRIGHT OIL LUCKY」が衝突し中国漁船が転覆、乗組員16名のうち4名は僚船により救助されるも、12名が行方不明となる事案が発生しました。海上保安庁は中国海難救助機関からの救助要請を受け、直ちに巡視船3隻、特殊救難隊6名、機動救難士3名、潜水士6名を派遣し、行方不明となっている12名全員（死亡）を転覆船内から救助しました。

中国漁船救助を受け、李天然中華人民共和国駐大坂総領事が第八管区海上保安本部を訪れ、犠牲者の遺族に代わって、日本の人道的救助活動に対する感謝の意が述べられました。

国際緊急援助隊・救助チームとして  
海上保安庁職員をメキシコに派遣

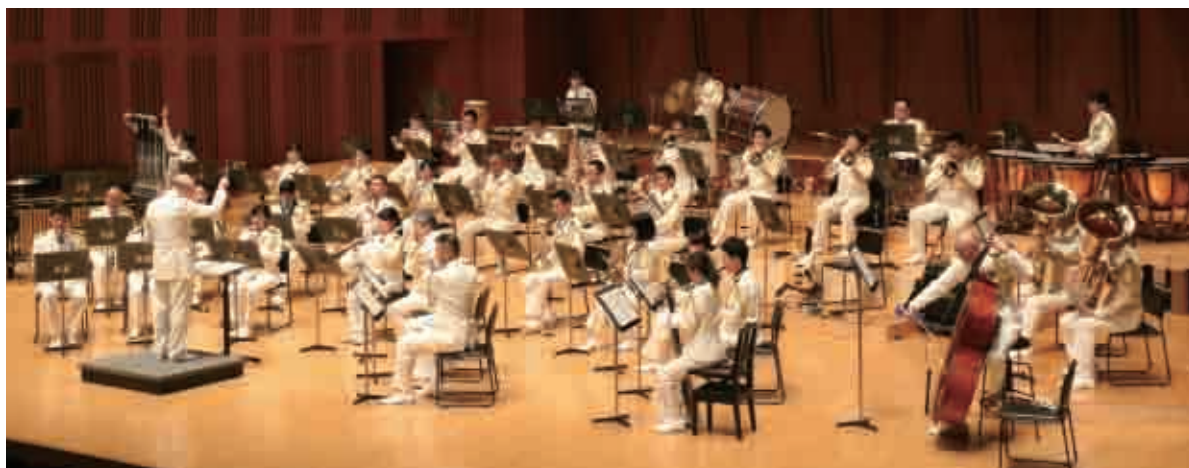


9月20日（現地時間9月19日）、メキシコで発生した大規模地震を受けて、日本政府派遣の国際緊急援助隊・救助チームに海上保安庁職員14名が参加しました。

現場は、ビルがパンケーキ状に倒壊しており、不十分なショアリング木材を支えとして傾斜したビルを支える方法）状況の中、縦穴を掘削した後、狭隘な横方向への搜索を強られるなど過酷な環境でしたが、一名のご遺体を回収したほか、瓦礫に閉じ込められた犬一匹を生体で救出しました。

搜索・救助活動終了後、現地の子どもたちから感謝の気持ちとして手作りのペンダントが贈られ、職員一人一人の首にかけられました。

海上保安庁音楽隊  
第24回定期演奏会を開催

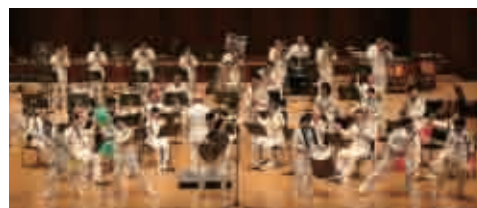


11月8日、東京芸術劇場・コンサートホール（東京都豊島区）において海上保安庁音楽隊第24回定期演奏会を開催し、約1,500人の方々にご来場いただきました。

演奏会は、第Ⅰ部オープニングの行進曲『黒馬騎兵中隊』で幕を開け、英国民謡の『スカボロー・フェア』や『イーストコーストの漁師の歌』を演奏しました。

第Ⅱ部は、楽しいサンバ隊とチューバソロで送る『恋のカーニバル』で始まり、『「君の名は。」コレクション』や『ベスト・オブ・ビリー・ジョエル』など映画音楽やポップスなど5曲をお届けしました。

曲の合間には、若手隊員4名が音楽隊に入隊する前の勤務地での仕事や生活を紹介します、海上保安庁の理解を深めていただきました。



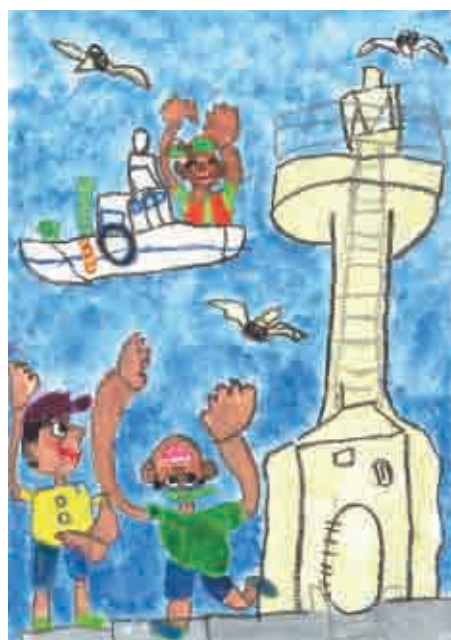
防寒帽を紹介する隊員



149周年灯台記念日である平成29年11月1日、「灯台のある風景」をテーマとした灯台絵画コンテスト2017の最優秀作品である海上保安庁長官賞受賞者に対し、長官から表彰状を授与しました。

「灯台記念日」は、日本初の洋式灯台である観音埼灯台の起工日に因んでおり、来年には150周年の節目の年を迎えることから、これを機に記念式典等の各種イベントを開催することとしております。

149周年灯台記念日

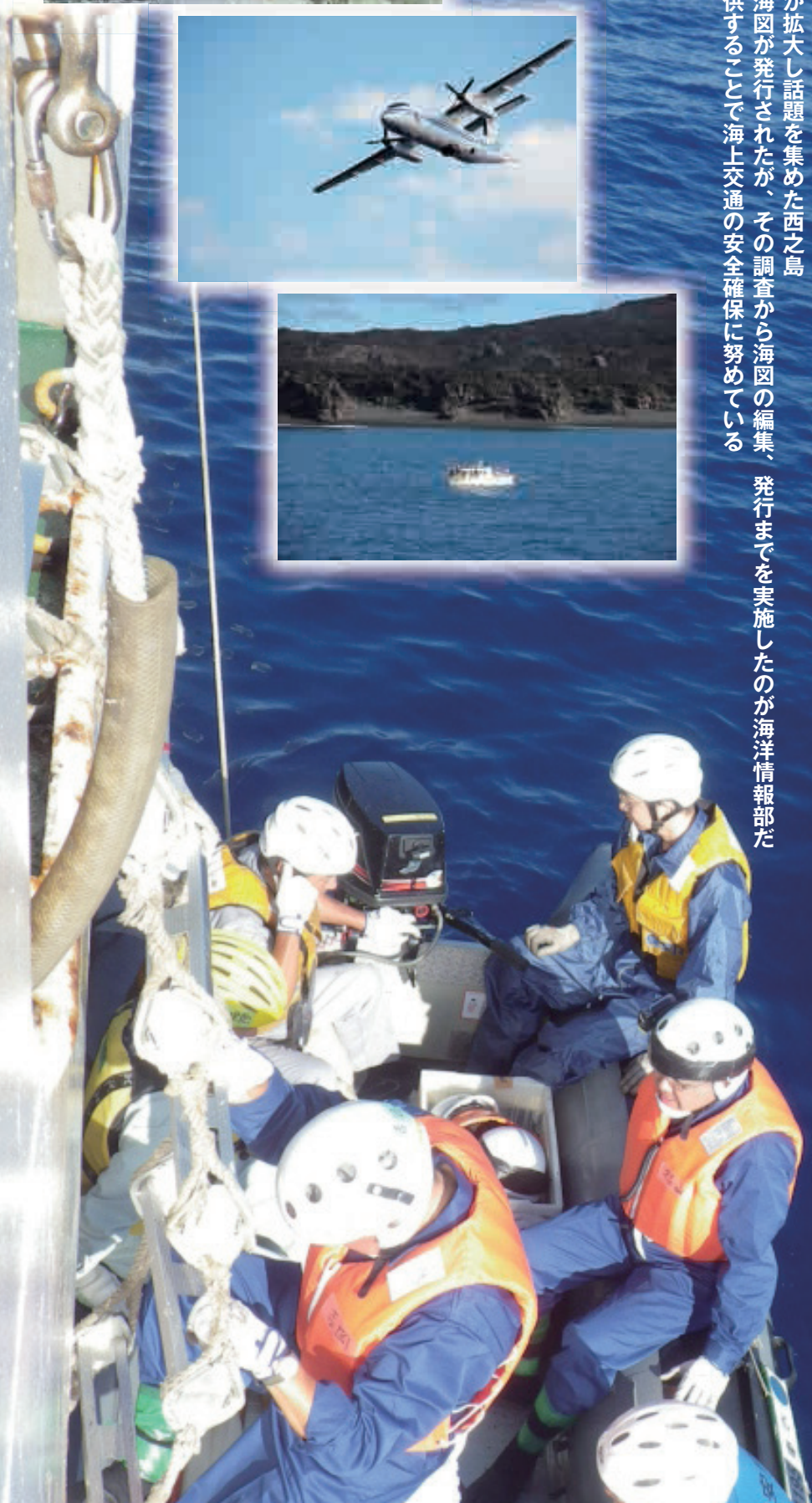


# 海を知り、海を生かす

海洋調査と情報提供を通じて日本の未来を拓く海洋情報部

火山活動により島の面積が拡大し話題を集めた西之島  
地形の変化に伴い新たな海図が発行されたが、その調査から海図の編集、発行までを実施したのが海洋情報部だ  
海を調べ、その情報を提供することで海上交通の安全確保に努めている

取材・文 中島敦（オ・サイト）

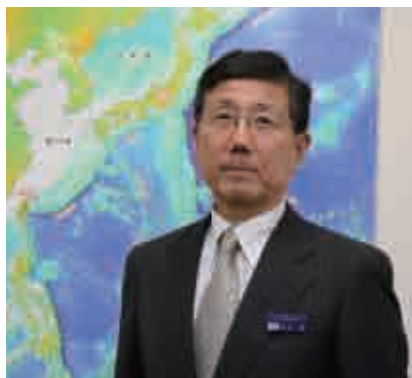
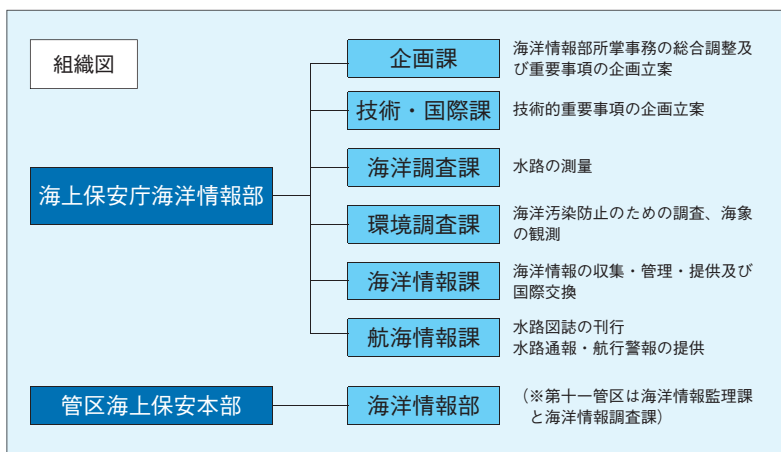




西之島を背景に、測深作業中の昭洋

## 開国直後から連続と続く歴史

海洋情報部の歴史は、昭和23年に設立された海上保安庁のそれよりも遙かに長い。明治4年（1871年）、開国間もない明治政府が海図作製のための海洋調査を開始し、海軍部に国の海洋調査から海図作製までを一貫して行う機関である水路局を設置したのがその始まりであり、翌明治5年には「釜石港」の海図を刊行、これが日本で作製された本格的な海図の第一号とされている。この水路局は運輸省外局の水路部を経て、昭和23年に海上保安庁水路部となり現在に至っている。



本庁海洋情報部を率いる仙石新部長。広い海と向き合い、日々、調査と情報発信に努め安全な海の活用を推進する業務について「継続は力なり」と語る。

航海の安全と防災・環境保全のための調査、そして海洋権益確保のための調査を行い、海図を作り、得られる海洋情報を日々発信していく、それが海洋情報部の主な仕事だ。四方を海に囲まれている日本では、身近なレジャーや漁業、そして海運と、人々の生活は海と深く関わっている。日本で消費されるエネルギーや食糧の大半は海外から輸入されているが、そのほとんどを担うのは海運だ。海洋情報部を率いる仙石新（せんごくあらた）部長は「それだけに海路の安全を保つことは、我が国にとって死活的に重要です」と海上交通の重要性を訴えた。

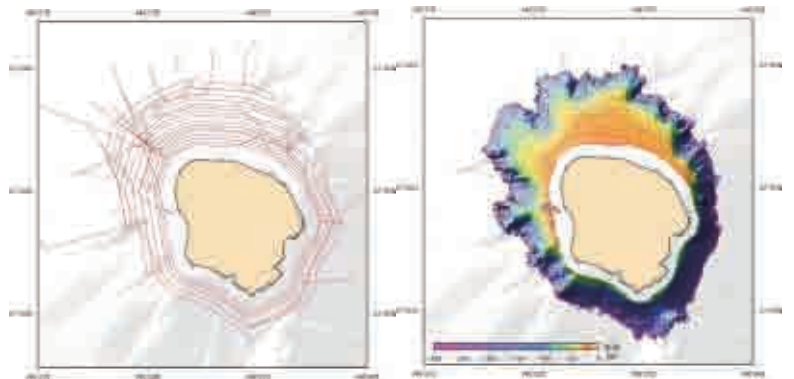
本庁の海洋情報部は企画立案・統括を担う企画課と技術・国際課、測量観測を手がける海洋調査課と環境調査課、観測され集まったデータを情報提供する海洋情報課と航海情報課という6つの課に大別される。測量船は大型の昭洋、拓洋を筆頭に本庁に5隻配備。また、海洋情報部は全11の管区海上保安本部にも設けられており、第三、四、五、六、七、十、十一管区には20メートルクラスの小型測量船が配備されている。



海上保安庁が導入した自律型海洋観測装置 AOV (Autonomous Ocean Vehicle)。浮体は、3メートルほどの長さで、遠隔操作または事前に設定したルートに従い移動し、自動で気象・海象の観測を行う。AIS受信機を備えており、接近する船舶を避け、接触を回避する機能を有している。

### 拡大する西之島も調査

海洋調査の目的は主に海洋権益の確保、航海の安全確保、防災・環境保全にあるが、海洋権益確保の例としては、国連海洋法条約を受けて昭和58年から平成20年まで実施した大陸棚調査が挙げられる。海上保安庁をはじめとする調査結果に基づいて、我が国は7海域(74万平方キロメートル)の海域延長を国連に申請、うち4海域(31万平方キロメートル)が認められた(その内2海域は関係国との調整が必要)。また審査が先送りされている1海域(25万平方キロメートル)についても、早期に審査が進めら



西之島で音響測深を行った特殊搭載艇マンボウII。測深した航跡とその測深結果。

れるよう我が国は働きかけている。

航海安全のための調査では航行に必要な海図等を最新の状態に保つため、港湾や航路の水深を音響測深機などを用いて測深し、海底の地形を明らかにしている。平成25年以降、火山活動によって島が拡大している西之島では、島及び周辺海域を測量し、今年6月30日に新たな海図を発行した。

西之島の調査は平成27年度から28年度に実施され、測量船の昭洋と拓洋、そして航空機MA725「みずなぎ」を用いて沿岸域の測深、極浅海域の測深、島内に基準点を設置してのGPS観測、沿岸海域での観測などを実施。噴火活動が継続していたため航行警報による注意が発出されていた間は、無人航行が可能な特殊搭載艇マンボウIIが威力を発揮、周辺海域の音響測深を行った。極浅部では航空機からのレーザー測深を実施した。

噴火警報の警戒範囲の解除後は、関係機関と共に上陸して調査を実施し、水路測量標を設置したが、環境保全のため島に上陸する際には持ち込む機材や服装まで細かく制約が設けられ、それに則つての上陸となった。最少人数・最小頻度の調査に留めるのはもちろんのこと、衣類・備品等は極力新品を用意し冷凍もしくはアルコール等によつて清浄。船にはクリンルームを設置、さらに上陸時はいったん全身を海中に沈めてから岸に上がるウェットランディングを徹底した。

このような調査を踏まえ今年6月30日に西之島の海図が発行されたわけだが、西之島ではその後再び活動が活発化するな

ど、地形は現在も変化している。

また、航海の安全に必要な潮流・潮汐や海流等を把握するための調査も実施している。全国20ヶ所の験潮所で潮の干満(海面の上下動)を観測しており、その観測結果はホームページでリアルタイムに公開されている。海流観測は船底に設置したADCP (Acoustic Doppler Current Profiler) で超音波を発射して海流を測定し、平日については海洋速報を、土日については海流推測図を発行している。10月には気象庁と共に黒潮の大蛇行について情報を配信した。速いところで4〜5ノットの速さで流れる黒潮は航行や漁業への影響も大きく、非常に大切な情報となる。

最近では自律型海洋観測装置 AOV (Autonomous Ocean Vehicle) を導入した。波の上下動を推進力とし、ソーラーパネルからの電力で機器を動作させるこの AOV は長さ約3メートル、重量約150 kg。約1.3ノットほどの速度で移動し、1年以上の長期無人観測を可能とする。様々な観測機器を装備しており気温・気圧、風向・風速、流向・流速、水温・塩分、波高、潮位を観測できる。現在8台が稼働しているが、平成29年度中に16台まで拡充する予定である。

防災・環境保全のための調査としては、地震火山噴火等の自然災害を最小限に抑えるため、海底地殻変動観測、海域火山調査等を実施しており、乗揚げ等による油、有害液体物質の流出など、海上における災害によって発生する被害を最小限に抑えるため、漂流子測を実施している。

また、江東区青海にある海洋汚染調査室





上陸前の安全確認

2016年～2017年に実施した西之島の測量では、航空機による極浅海域の測深や特殊搭載艇マンボウⅡによる測深を実施した。火山活動が落ち着いてからはゴムボートにより上陸し、水路測量標やGPSアンテナを設置した。



航空機からのレーザー測深



水路測量標の設置



GPS観測

## 調査で得た情報を人々へ配信

(青海総合庁舎内)では、日本周辺海域の海洋汚染や放射能の調査・分析を行っている。放射能調査は国の原子力行政二元化の方針に基づいたものであり、日本周辺の海水・海底土を採取してモニタリングを続けている。この室では放射性物質や危険な薬品を扱うため、オートロックと監視モニターを備え、さらに空調も独自システムとなっている。勤務中は常に職員の居場所を把握しているだけでなく、残業する際も必ず2名1組で行うなど、徹底した安全管理体制が取られている。

海洋調査から得た水深、潮流、潮汐などの情報は、航路や航法といった航行安全に必要な情報と共に海図などの水路図誌として作製・刊行され、水路通報や航行警報、海洋速報などにより最新情報が提供されている。

海図は計画に基づいて年間80～100枚程が作製される。縮尺は4000万分の1から5000分の1まで。航行ルートの設定には広く全体を俯瞰できる小縮尺のもの、入港する際には詳細な大縮尺のものというように、航海者の用途に応じたスケールが用意されている。

海図には水深は当然だが航海の目標となる岬などの海岸地形や構造物、灯台など航路標識の配置などが示されているが、当然のことながらこれらは国際基準に則った記号や表現方法に基づいて編集される。また日本語だけでなく英語版も用意されている。

一定以上の規模の船には電子海図表示装

置が搭載されており、この場合は電子海図が活用される。電子海図のデータには、それがいつ得られたものであるかなど、海図には記載されない情報も収められている。

海図、電子海図どちらも、その編集は細かだけでなく、ただコピーして貼り付けるような単純作業ではない。編集作業にあたる職員の一人は「自分が描く線がわずかにずれただけで、実際の海ではさらに大きなずれが生じてしまいます。使う人の視点で分かりやすくを心がけています」と説明。

さらに「縮尺が大きくなると情報量も増えますが、実は小縮尺の方が編集は難しい。掲載できる情報が限られてくるので、どの情報が必要なのかを正確に理解し、大事なもののだけを残していく。この作業が非常に難しいのです」と海図編集の難しさを語った。

航路標識の変更など、海図・電子海図を最新維持するために必要な情報や海上作業などの一時的な情報を提供しているのが水路通報と電子水路通報だ。海岸線や水深などの変化に合わせて内容を更新するための情報が提供され、ユーザーはそれぞれ手持ちの海図・電子海図を更新する。海図の内容に大きな変化があった場合には修正ではなく改版を行う。

航行警報には大洋を航行する船舶を対象とするNAVAREA航行警報、距岸約300海里以内の沿岸海域を航行する船舶を対象とするNAVTEX航行警報、太平洋・インド洋及び周辺諸海域を航行する日本船舶を対象とする日本航行警報、そして港及びその付近を航行する船舶を対象とする地域航行警報がある。NAVAREA

航行警報の種類によるが、情報は日々数回定時及び随時、インターネット衛星等を介した無線電信、インターネット、無線放送等により提供されている。

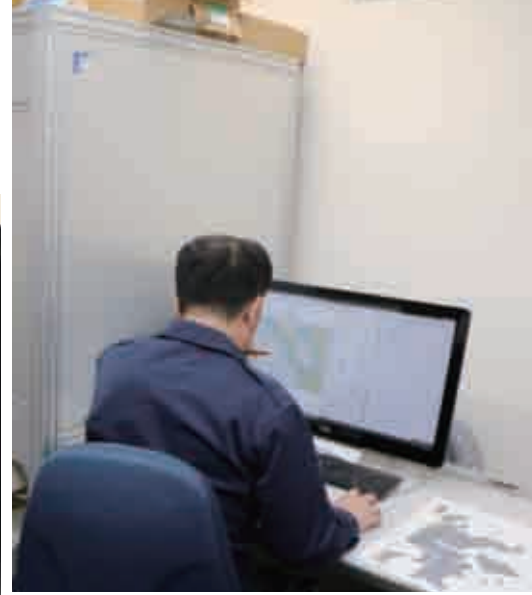
## 新たな海洋情報の表示システムの開発へ

現在、海上保安庁では様々な海洋調査機関から得られた海洋情報を二元的に管理・提供する海洋台帳を運用している。このシステムによりユーザーはインターネットを通じて様々な情報をビジュアル的に地図上に重ね合わせて表示し、海洋開発や海洋環境保全、沿岸防災、海洋教育など広範囲に活用することができる。

この海洋台帳をさらに進化させたシステムとして現在準備が進められているのが海洋状況表示システムだ。総合海洋政策本部



海洋汚染調査室では、採取してきた海水や海底土に含まれる汚染物質や放射性物質を測定し、インターネット等で公開している。



従来の海図と更新した海図の2枚のデータを取り込むと、相互で異なる箇所を表示する機器を用いて校正を行う。



アルタイムに表示できること。また地球全体を対象とした広域性も備えたものになる。扱う情報としても衛星画像や降水分布、風向風速、海面水温、船舶動静、ライブカメラ映像、リアルタイム海流、海洋モニタリング情報など、より多彩なデータを取り込み提供することで、災害発生時の漂流物・漂流者の予測や効率的な運航航路の選定、海上浮流油発生時の防除計画策定など、災害から産業振興、海上安全、そして環境保全などに有効なシステムとなるだろう。

### 国際的な水路技術の発展に貢献

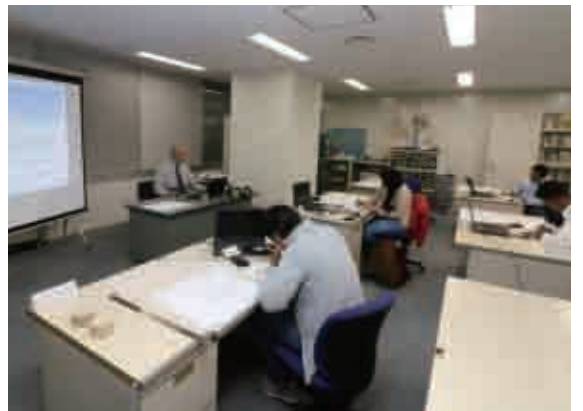
日本は海図の世界的な統一を図るために設立された国際水路機関に加盟し、水路分野における基準策定に寄与するとともに各国と水路データ・情報の交換を実施するなど世界的な協力関係を構築している。海外への技術協力の分野でも、毎年開発途上国の水路技術者に対して研修を実施、各国の水路業務の発展に貢献している。

JICAと協力して毎年実施するこの集団研修は約6カ月に及ぶもので、これまでに44カ国から400名以上の水路技術者が参加、それぞれの国で活躍する人材を輩出している。

の決定に基づき、日本の海洋状況把握に資する海洋情報の効果的な集約及び的確な共有・提供を行うための情報システムとして、海上保安庁が海洋台帳を基盤として新たに開発するものだ。

関係機関からのデータを表示するのは海洋台帳と同様だが、大きな特徴はそれをリ

「日本の海だけを調査して安全にしても外航航路の安全を保つことはできません。開発途上国の海図をよくすることで国際航路の安全を保つ、そのための国際的な能力向上の取り組みを進めています」と仙石部長は説明した。海は世界と繋がっている。海洋情報の収集やその提供も、諸外国と連携が取られてこそ有益な活用に繋がるものだ。



JICAと協力し、開発途上国を対象に水路技術者養成の国際認定研修を毎年実施。2017年度はマレーシア、ウクライナ、インドネシア、フィリピン、エルサルバドルの5カ国から計9名が参加、海図作成に必要な理論を学び、実習を行った。

### 今後の海洋情報部の重要な取り組み

仙石部長は、今後の海洋情報部の重要な取り組みとして、海洋権益を守るための調査と海洋状況把握の2点を挙げた。

定されている。平成31年度就役予定のこの新造船は、総トン数約4,000トンという、これまでで最大規模のものとなる。そしてもう一つは、海洋環境保全を図りながら調和を持った開発を進め、自然海洋からの脅威から日本を守るために海の今を知るということ。前述した海洋状況表示システムが、ここでは大きく役立つと期待されている。

仙石部長は「我々の仕事は、すぐに結果を得られるようなものではありません。西之島にしても黒潮の大蛇行にしても、現象としては数年続くような長いものばかりです。広範囲で時間スケールも大きいものを対象としているのですから、たゆまず、少しずつ、こつこつと成果を積み重ねていく。そういう心持ちでこれからも海と向き合っていく必要があります」と言葉を結んだ。

## ディーゼル・エレクトリック方式を採用し 1998年シップ・オブ・ザ・イヤーを受賞

本庁海洋情報部所属の測量船昭洋は、総トン数3,000トン、全長98m。海洋情報部でもっとも大型の測量船だ。測深と海底下の構造を測ることが主要な作業となっている。

いちばんの特徴は観測精度の向上のため静粛性と低振動の電動モーターを推進機として用いている点である（そのための電力はディーゼルエンジンによって賄われている）。また観測作業甲板の船尾端中央には6トン用、張出甲板には3トン用のギャロスが装備され、観測機器の曳航や揚げ下ろし等に使用されている。

海の深さを測る測深機は深海用と浅い海域用の2種を装備。片舷75度、両側で150度の範囲を一度に測深できるマルチビーム測深機により、効率良い測深を可能としている。また、深海用音波探査装置を備え、海底下の地層構造を調べられるのも大きな特徴だ。観測室ではこうして収集したデータを30分置きにファイルにし、それをパソコンに移してその場でデータ処理を進める。

小型搭載艇を2艇装備。無人航行可能な特殊搭載艇マンボウⅡは、危険海域での調査に威力を発揮するもので、西之島での測深にも活用された。

# 測量船 昭洋



観測室



ギャロス



船橋



ストリーマケーブル(音波探査装置受信部)



特殊搭載艇マンボウⅡ



機動測量艇

## 「深海の水の冷たさを感じ、 最初に試料に触れ、目にする魅力」

測量船昭洋 観測士補 佐藤 望海(22歳)



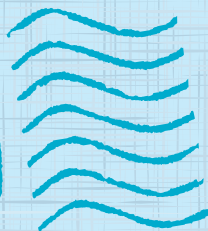
父が船に乗っていたこともあり、子供の頃から海上保安庁の船を目にしていました。ホームページで調べると海洋情報部の業務に海の調査というのがあり、これは面白そうだなと思ったのが入庁のきっかけです。もともと数学や物理、化学が好きな理数系です。

船では実際に採取したデータに一番に触れることができるのが魅力です。3,000mの深さから試料となる海水を採ってその冷たさを感じたり、海底の地形のデータも陸上勤務の人より先に見ることができる。そういう事がこの業務の醍醐味です。地層の厚さを測る深海音波探査ではエアガンを組み立て120気圧の空気を海中に発射します。すごい圧力で音も大きいのですが、うまくいった時には達成感が味わえます。

沖ノ鳥島も実際に上陸して調査しましたし、西之島だってなかなか行けない場所でしょう？ 人の行けないところに行けるのは魅力です。それに噴火。西之島では双眼鏡で噴火の様子を観察しましたが、あれを見たらテーマパークの火山とか、迫力が違いますね。

西之島では無人航行中のマンボウⅡが故障して流されてしまったことがあります。あの時、「お前、身軽だから行ってこい」と言われて梯子から降り移って有人航行させましたが、波もあって揺れている中で緊張しました。でも、そういう仕事を任せられたわけですし、無事に任務を終了した後は嬉しかったですね。

出航するとだいたい一ヶ月間近くの長期行動になります。携帯の電波なんて届きませんが、すぐに慣れてそれが普通になります。一方でまとまった休みが取れるので旅行にも行きやすいですし、オフには仲間と連絡を取り合っていて出かけています。でも、山登りや川釣り、海釣り、それにオートバイと多趣味なので、実は休みも忙しいんですね(笑)



# 海洋情報資料館

海図第1号釜石港から伊能図模謄写図

海図の石版、潮候推算機など、貴重な品々を多数展示！

## 「日本水路測量の父」 柳 楯 悦

**津**藩出身の柳楯悦（やなぎならよし）は、24歳の時に長崎の海軍伝習所に入所、勝海舟らと共にオランダ式の航海術や西洋数学に基づく測量術を学ぶ。その後、明治9年に海軍に水路局が創設され局長に就任しました。列強各国が日本の沿岸や港を測量していた時代に、日本人による航海と測量の重要性を説き、国内各地の海図を作成しました。



### 海洋情報資料館

〒135-0064

東京都江東区青海2丁目5番18号

国土交通省青海総合庁舎1F

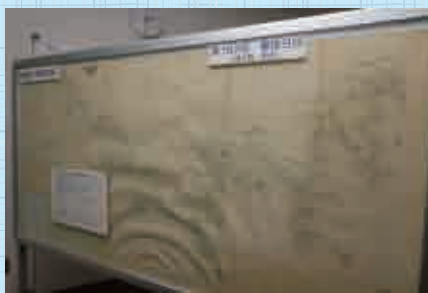
■開館時間：10時～17時

※火・木・土曜日及び12月29日～1月3日を除く



## 陸中釜石港之圖

**柳**らは明治4年4月から北海道沿岸の測量を実施。8月に小樽港の測量を終えると、帰路の途中で陸中の宮古港を測量、さらに9月に釜石港を測量しました。測量した時期は宮古港が先でしたが海図としては釜石港が先に刊行され、日本の海図第一号とされています。



## 伊能図模謄写図

**伊**能図とは、伊能忠敬と彼の測量隊が全国を測量して制作した日本地図の総称で、制作時期や縮尺等、複数の種類があります。初代水路部長を務めた柳楯悦は海図を作成するにあたり伊能図の副本を模写しましたが、大正12年の関東大震災で焼失してしまいました。実用のために再模写されていた147枚が難を免れ、現在に至っています。従ってこの海洋情報資料館に保管されているものは謄写図をさらに謄写したのですが、これだけの数がまとまって保管されているところは他になく、非常に貴重な資料と言えます。

## 戦火を逃れた一級図化機

**昭**和15年にドイツから潜水艦で輸入されたというステレオ・プラニグラフ（一級図化機）C5型。カールツァイス社製。当時の水路部（現在の海洋情報部）が使用しました。各地に移動させながら第二次大戦中の戦火を逃れており、同型の製品は現在、ドイツと日本に1台ずつしか残されていないと言われています。





## 海図の石板(東京湾港)

**日**本で海図を作り始めた明治初期には、海図を印刷するための種版には主に耐久性に優れた銅版が使用されていました。ただ、銅版の製作には時間が掛かるため石版印刷の研究が進められ、明治27年以降は石版による海図も作成されました。日清戦争の需要に応じたという背景もあります。しかし石版の原料となるドイツ産の石灰石の購入に時間を要すること、非常に重いため格納や運搬に不便であることなどから、大正期になってからは亜鉛版へと役目を引き継ぐことになりました。



## 潮候推算機

**電**子計算機のなかった時代、複雑な潮汐現象の計算に用いられたのがこの潮候推算機です。これはイギリス製の特注品で、昭和32年10月に海洋情報部(当時の水路部)に設置されました。日本最大の潮候推算機であり、本機の導入で潮汐の精度は飛躍的に向上しました。



## 西之島の調査概要も展示

**西**之島の火山活動とその調査についてまとめたコーナーでは、西之島の変遷や地形の変化の様子をまとめて知ることができます。もちろん、どんな測量を実施したのか、その手法についても解説されています。



## 水路記念碑(レプリカ)

**平**成27年、海洋情報部はそれまでの築地から江東区青海に庁舎を移転しましたが、明治4年から140年もの歴史を刻んだ築地は「日本国海図及び海洋調査発祥の地」とされ、水路記念碑が建てられました。海洋情報資料館にはその記念碑のレプリカが飾られています。



## 東京湾の変遷

**明**治から現在まで、東京湾の海図を並べてみると、埋め立てで姿を変えてきた東京湾の変遷を知ることができます。昔は川崎、越中島から船橋、千葉から木更津にかけての海岸沿いに干潟が広がっていましたが、その後は経済発展に伴う大規模な埋め立てで人工島が増えていきます。

## 冬休み特別企画

### 世界の海図展を開催!

国土交通省青海総合庁舎1階の「海の相談室」では、冬休みの特別企画として「世界の海図展」を開催します。世界各国で刊行された海図をぜひご覧ください。

### 開催日時

平成29年12月18日(月)~平成30年1月21日(日)

午前10時~午後5時まで

※火・木・土曜日及び12月29日~1月3日を除く ※事前予約不要、入場無料



第四管区

四本部  
「6時間リレーマラソン」に参加  
海の緊急ダイヤル118番  
PR用タスキを繫ぐ

9月16日



第一管区

広尾保安署  
巡視船とかち解役  
36年間おつかれさまでした

9月6日



第五管区

田辺保安部  
南紀白浜空港「空の日フェスタ」で  
地元チアリーディングチームとう  
みまののコラボレーション

9月30日



第一管区

紋別保安部  
能取岬灯台点灯100周年記念  
一般公開

10月1日



第六管区

小豆島保安署  
坂手港で泳ぐいのしし発見!

11月7日



第二管区

二本部  
第二管区海上保安本部展示総合訓練を  
10年ぶりに実施

10月14日



第七管区

福岡航空基地  
地元中学校が基地の仕事体験

9月6日・7日



第三管区

二本部  
現場で必要な知識・経験を積むため、  
新任配属者30名に対する合同集中  
研修を実施

9月24・26日



唐津保安部  
友の会会員が1/50スケールの巡視船  
まつづらを製作中

11月10日



舞鶴保安部  
大型クルーズ客船でのプロジェクショ  
ンショーで海上保安庁の業務をPR

9月2日



伏木保安部  
「伏木場所大相撲」に海保部屋から  
精鋭力士5人が参加

9月3日



串木野保安部  
Life Guard Children等と  
ともに漁船海難防止強調運動を実施!

10月7日



中城保安部  
総勢11機関による合同潜水訓練実施

9月22日



海上保安入学校  
第63回西日本新人カッター競技大会  
にて男・女両新人クルーが優勝!

10月28日

女子新人クルーは3連覇



海上保安学校  
船舶運航システム課程主計コース  
第50期学生による総合調理実習  
〜一年間の実習の成果を披露〜

9月6日



本庁  
外国海上保安機関に対する能力向上支  
援専従部門(通称:「海上保安庁モバイ  
ルコーポレーションチーム」)発足

10月2日

第十一管区

第七管区

大分校

第九管区

学校

第九管区

本庁

第十一管区

# 第18回未来に残そう青い海・海上保安庁図画コンクール 受賞作品が決定！！

海上保安庁は、公益財団法人 海上保安協会との共催で、海洋環境保全思想普及活動の一環として「未来に残そう青い海・海上保安庁図画コンクール」を行っています。今年で18回目を迎えた本コンクールでは、全国の小中学生から30,839点の作品応募があり、応募作品の中から特別賞(国土交通大臣賞)をはじめとした次の受賞作品が決定しました。



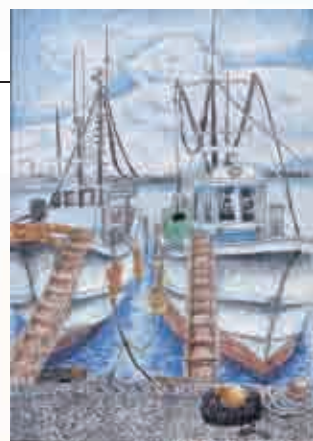
小学生高学年の部  
にしざと あゆみ  
**西里 愛未**さん  
沖縄県  
ひがし  
宮古島市立 東 小学校 5年生



小学生低学年の部  
ありま いおり  
**有馬 一織**さん  
たけ  
鹿児島県鹿児島市立武小学校 2年生



小学生高学年の部  
むらかみ りお  
**村上 莉央**さん  
広島県  
うじな  
広島市立宇品小学校 6年生



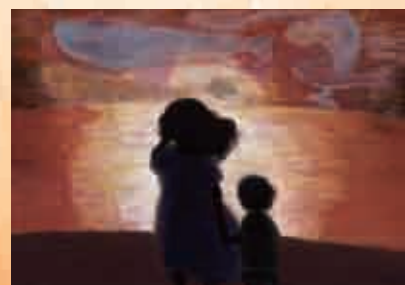
中学生の部  
かわの そら  
**川野 空**さん  
徳島県  
まつしげ  
松茂町立松茂中学校 1年生



小学生低学年の部  
もうり とさ  
**毛利 斗綺**さん  
愛媛県  
まつのにし  
松野町立松野西小学校 3年生



小学生高学年の部  
かめだ うみ  
**亀田 碧海**さん  
富山県  
とうり  
入善町立桃李小学校 4年生



中学生の部  
はまだ かなな  
**濱田 葉奈**さん  
愛媛県愛媛県立  
うわしまみなみ  
宇和島 南 中等教育学校 2年生